



平成四年
(1992)
一月十五日発行
(年四回発行)

猫養通信

発行人 東明雅
発行所 柏市つくしが丘2-2-12東明雅方
Tel. 0471-75-1192

乞食袋

東明雅

芦丈先生の教えをもう一つ、実はこれは芦丈先生独自の教えではなくて、古い連歌の時代からの教えであるが、先生もよく言われた言葉に乞食袋というものがある。

雪中庵琴太の「俳諧発句小鑑」によれば、「乞食袋の事、此の一条は俳諧をせん人、強ひて学問にも寄らず、飛花、落葉、人の善悪、天地の盛衰、旅の哀れ、万事を拾ひ入れて置事也」とある通り、俳諧人は森羅万象、あらゆることを頭に入れていなければ、適当な付句が案じ出されない。それだから、乞食が袋一つを携えて、それに拾ったものすべてを詰めこんでおくように、神祇・釈教・恋・無常の外、妖怪・病氣・山川草木、鳥獣虫魚、飲食の沙汰から地名・人名、時事に関すること、風雨・寒暖の具合などまで、平常から習い、知り、覚えて頭の中に入れておかねばならないというのである。

都心連句会の重鎮であった故野村牛耳氏は、連句を巻く時、科学的な知識の乏しさを補うため、毎夜、理科学辞典を耽読されたという。これは牛耳先生から私が直接聞いた話である。流石、一流の文人の心得は別であると感心するが、これほどに努力しないでも、それぞれ、あらゆるチャンスをとらえて、天地万物についての知識・体験を重ね、これを蓄えておく努力を惜しんで

はならないのである。連句作者は博学でなければならぬ。しかし、深く且つ正確なものである必要はなく、むしろ、浅くてもひろいことが求められる。それは系統や組織があれば、あるにこしたことはないけれども、いろいろの分野にわたっていることの方がより大切であ

ろう。

これに関連するが、かつて、水平思考型と垂直思考型ということが言われたことがあった。

私は考えるに、垂直思考型の人とはなかなか浅く広くということはできないのではないか。そのような人は折角、連句に志しても、なかなか連句になじめず、究極は断念される例が多い。無差別に一切のものを袋に取りこんで、必要の時ひよいと出すという器用なことがなかなかできないのである。ここで私は俳諧の名人松尾芭蕉は果して水平思考型であったのか、あるいは垂直思考型であったのかと迷う次第である。

芭流朱連句

芭流朱連句会主宰 鈴木 春山洞

はじめから、ふざけた話であり、心臓に毛の生えた話になつてしまつて恐縮です。芭流朱連句の「芭流朱」は当て字です。意味なんて無いのですが、初めて目におとめ下さった方々には、芭蕉流の何とかと連想して下さい、言い訳しきりになってしまふのですが、もともと「バルシュー」はドイツ語でして、魚の鱸(すずき)の意味があります。そこで私の姓の鈴木(すずき)の掛詞と牽強付会(洒落)したままです。すみません。お許し下さい。

私の住所、松山市三津地区は古来俳諧の盛んな所で、芭蕉塚が四か所あり、近所には日本で最初の俳句月刊雑誌「まさごのしらべ」を発行した大原其戎の遺址があったりします。正岡子規は勝田主計(後に大蔵大臣)に連れられて、この大原其戎に俳句の手ほどきを受けています。私は中学三年

の時に松根東洋城先生の「流柿」会員になりました。中学五年生で巻頭句初入選し、卒業後、早稲田大学に学び、東洋城先生の直接の御薫陶を受けました。時に昭和十二年でした。寺田寅彦が昭和十一年に逝去した後、唯一の連衆を失った東洋城先生は、連句では独吟時代に入って居られました。しかし少年時代に「流柿」誌上に見た美しい連句の印象は強烈で忘れられませんでした。教職を定年退職すると共に連句実作の道に入りました。

東洋城先生の論文の中に、連句は研究や鑑賞の対象とするにとどまらず、連句こそは実作することが大切であることを唱道されている部分がありますので、定年退職と共に得た自由時間を充ち、実践しました。東明雅先生と岡本春人先生と草間時彦先生と春山洞との文音四吟は、勉強になりました。脇起歌仙「春山」の巻は、発句「春山の山彦は朱髪童子かな 松根東洋城」に発する一巻で、春山洞は、この一巻で脱皮したと思っております。爾来諸先生に可愛がっていただき、東明雅先生にも親交させていただきました。

今回、七十四才にして連句専門雑誌「芭流朱連句」を持つことになりました。芭流朱先生・諸先輩・皆様方の御支援の御蔭と有難く思い感謝申し上げます。もとより浅学非才です。雑誌を作って、その内容・中身、肝心のところは、東明雅先生の「連句辞典」を、そのまま、まる写しさせていただきます。盗作でなく、出典としてあげて、堂々、まる写しさせていただきます。「連句」についての独創的卓見が簡単に出来たりするものではありません。東明雅先生の暖かい御慈愛の中に、どっぷり浸りながら、残り少ない人生を過ごさせていただきます。宜しくお願ひします。

冬晴れの十二月八日(日)、東京深川の芭蕉記念館で、平成三年度・猫養会最後のイベントとなった立機式が行われました。

小林 しげと

矢島 房利

本屋 良子

既報のとおり、この日、立機されたのは羅浮亭正江、行々子庵平朗、桃徑庵和子の三宗匠。正午から始まった式では、新宗匠紹介のあと、明雅先生からお三方へ免状・文台を授与。続いて、大林柚平先生(都心連句会)はじめ来賓の五先生から、立機の意義や新宗匠への期待を語る祝詞を頂戴。また、来賓の一人・内田兼舟先生(山形県新庄市・北陽社)は祝句を披露され、座を格調高く盛り上げてくださいました。

式の後半では、参加者各自が三宗匠に贈った祝句も紹介。それぞれのお名前にちなむ事物やお人柄を詠み込んだ秀句・名(迷)句の数々が、実行委員長の中川哲氏によって吟じられると、微笑が広がる一幕も。最後に祝電披露、新宗匠への花束贈呈があり式は終了。次いで、明雅先生を宗匠として、立機記念の正式俳諧(二十韻)興行。脇宗匠と副宗匠は新宗匠のお三方で、中島啓世氏の発句「吟声のけふ澄み透り冬紅葉」に続く付けは、

玻璃越しに見る庭の雪吊り 杉事
括り糸機の準備もとのひて 正江
お醤油注ぎを取って下さい 和子

いづれもその方らしい句が並びました。三好龍肝先生(東京慈眼社連句会)の音頭による乾杯から祝宴に移り、十二卓に分かれ連句興行。十二の席名は「若菜」「紅葉の賀」など、源氏五十四帖から「お目出度い名前」をより抜いたもので、幕引きの祝儀太夫と合わせ、最後まで華のある一日――。参加者は九十二名。神戸、郡上八幡など遠方から駆け付けてくださった方も多く、大盛況でした。(文・岩井啓子)

このたびの立機式に当り羅浮亭秋元正江・行々子庵杉江平朗・桃徑庵式田和子様らの新宗匠としての門出を、東先生、同門の方々とともに心からお祝い申し上げます。とりわけ先生のお喜びはさぞやと拝察いたします。

この立機(免状と文台の授与)の趣旨は旧套と異なり、ご三方の永年に互る連句研鑽の頭影及び正風連句の興隆と後進の育成を期待されることと伺っております。もし立機が名儀だけのものではたら無意味でしょう。ご三方はすでに優れた業績を残され、現在もそういうお仕事を続けておられますが、新宗匠として一層「蕉風連句を体得」され、その普及に努め、現代連句の灯台守としての役割を果たして頂きたいと思っております。

連句は伝統文芸の様式であります。この認識によりただ古臭いだけではないけないだからといって新奇を銜うだけでもいけない。別にこと新しい言葉ではありませんが、連句の真理ともいうべき温故知新、不易流行――この芭蕉の追い求めてやまなかつたと同じ覚悟を大切に、先生の名を尊かしめないよう後輩のため、連句会のため活躍頂けたらと存じます。こういう意味でこの立機式は正しい蕉風の実践宣言、平成の旗上げといっても過言ではありません。卒爾ではございますが、私など俳諧いまだ儀の口を解かずの有様、今後いろいろな機会にご一緒になろうかと存じますが、よろしくご指導のほどお願い申し上げます。お祝いの言葉が終りにお願いになって恐縮でした。先生の健勝、猫養会のご発展をも祈念してやみません。 万謝

主宰俳句誌を創刊して独り立ちするといふ場面は、身辺にも一再ならず見て参りました。立機は、それとおよそ性格を異にするのだろうと思えます。そして、その主宰・創刊からも、最も遠いところに身を置こうとしている小生には、立機以後のあれこれ、ただただご苦労さまと申すばかりありません。しかし、俳諧はひとえに(へ座)の文学、そのことゆえの必要な手立ては、先達によって十分譲ぜられねばなりません。もうもろのこと、すべてこれ文学するといふ一点に集約されるべきもの、と愚考仕ります。言葉が整いません。折角ご健吟、ご自愛のほど願ってやみません。

祝 羅浮亭立機

小林 千雪

加藤 道子

東明雅先生は歌仙「祝立機」の巻の発句に秋元正江様を「色も香も紫式部か小式部か」と詠まれた。正に文字どおり才色兼備気品高く博識をもつ中に凛とした勇気を発揮される。それでいて十六年の交際中、自慢を耳にしたことがない。因みに立機式に着用された糊類染、葦手模様の美しく立派な色留袖が、ご自身の作品であったことなど全く知らなかった。しかも染芸家として将来を嘱望されていたことも、誰にも告げず連句の世界へ身を打込んでおられた。黙々と作り上げることが大好きという性分には羨ましいほどの感銘を受けた。外柔内剛、感性高き正江様のご健詠を祈念する。

杉事先生御立機おめでとうございます。湘南連句会では五年以上もご指導いただき居ります。脇の杉事とも述懐の杉事とも世に言われているが、私達が一番勉強になるのは、その付味のわかり易さとちよっとひねられるそのこつである。
坊ちゃん湯の太鼓鳴り出す 淑子
子規漱石東洋城のしかめ面 杉事
しかめ面とつけた所にひねりがある。
井戸端会議声をひそめて 良子
一盧勝ち三金消えし青瓦台 杉事
「三金が味噌だったなあ、アッハッハ」というお声が聞こえてきそうである。
どうぞお元気でいつまでもご指導下さい。

行々子庵新宗匠の深読み

杉事先生、このたびの立機式おめでとうございます。我が親の事のように喜んでおります。ダンディな行々子庵様の、大人の風格を持つおらかさを慕い、湘南連句会がご指導いただくようになって早六年余となりました。
16 犬猫フーズ間違へて買ひ 杉事
17 晩学のお世話になりし友多く 道子
18 釣びとの待つ鮒の巣離れ 杉事
十月のおんめ様での二十韻からですが、巻終えての先生の一言、「早く巣離れ出来るようにお願いが込めてあるんですよ」。深読みも出来ぬ不肖の弟子、当分は巣離れ出来そうにもありません。今後ともよろしくお願い申し上げます。

桃井の里

渋谷 千鶴子

この度は、素晴らしい立机のお式拝見させていただきありがとうございます。

緊張して臨みましたが、思っていたよりな堅苦しきはなく、それでいておごそかな気分が通っていて感動いたしました。

杉並区桃井の和子先生の連句会場へは、夫と赤ん坊を連れての参加で、いつもご面倒おかけしております。連句は始めて間がありませんが、言葉の勉強になり、身の回りの事柄について沢山教えられることがあります。頑張っついで行こうと思えます。どうぞよろしくお願いたします。

桃徑庵の発展をお祈りしております。

粹な先生

海野 海砂

女性に向かって粹と申し上げたら叱られるかもしれません。粹と野暮、派手と地味が対語で、たしなみのあるご婦人は努めて地味を心掛けておられたようですから。

式田先生の作品を拝見しまして、氣っ風のよい啖阿に一驚し、その痛快さに憧れておりました。伝統芸能への深い造詣に加えて現代風俗の軽薄なところも決して拒絶なさらない懐の広さも併せてお持ちで、現代の粹とは斯様なものかと心服致しております。無骨者の小生にとって、まことによき宗匠のご誕生で、大いに学びたいものであります。

一層のご活躍が楽しみです。決まり文句の野暮を申し上げたことお許しください。

立机式に臨んで

内田 素舟

一昨年(平成元年)、芭蕉おくのほそ道紀行三百年を記念して開催した新庄大会も、東明雅先生始め、猫養会からいつもご指導賜り、それが縁で立机式のお招きに与った次第である。

貴人席は若輩の私には決して座り心地のよいものではなかったが、総てをまのあたりで拝見することができ、東先生や実行委の方々の見事な演出は、優雅で格調高く、筆では表し得ない素晴らしい一言に尽きる式典であった。

私らの北陽社は昭和の始めより立机式が行われているが、男性が主の結社で俳諧をたしなむ仲間もないことから、東京春秋庵のしきたりを受け継ぎ、東北地方らしい荒削りで男っぽい立机式を重ねてきたようである。

私が先輩から教わったことで、立机式や正式俳諧興行の諸作法は、書くこと、懐紙の捌き、吟声、それぞれの役割の作法などは、和歌と茶の湯から取入れられており、これが俳道であると悟されたものである。このたびの立机式は正にこの道にふさわしい式典であり、猫養会が佳き伝統を築かれた日でもあると思う。

立机式に臨み、御三方の宗匠の益々のご活躍と、我が社の古き伝統にもう少し雅趣のある行き方など、思いに耽りながら午後十一時、一人だけの車輛から降りたった駅のホームに、ひらひらと雪が舞ったが、身も心も清々しい一日であった。

新庄北陽社

立机式に附随したこと

豊田 好敏

古い諺に「終り良ければ、すべて良し」という言い伝えがあります。

平成三年立机式の祝賀の宴が、大多数のご出席者から「時の経ったのを忘れたくらいに面白く、楽しかった」とのお言葉をうかがうたびに、中川哲さんの義太夫をこの祝宴のトリに考えられた東明雅先生のご着想と、晴れの舞台から新宗匠の引っ込みに、トッチリチンの三味線を案出された式田和子さんに、すべて脱帽した事務局でありました。

この日語られた義太夫は「お軽、勤平旅立ちの段」と紹介されました。ご存じの忠臣蔵三段目で、塩治判官のお供で来た勤平が、顔世御前の手紙を師直に届けるお軽と出会い、ちよいの間をやってる間に、松の廊下の刃傷がおきて、ラブロマンスがもとで大事な場面に居合わせなかった勤平は切腹して責任をとるべく、お軽と駆け落ちをしようという部分だそうです。

哲さんは、この演題を選んだいきさつを「義太夫は謡曲などと違って、お祝いの舞台で語るような物語が少ない中で、この演目は恋と滑稽が入り交じって連句的な軽みと、旅立ちが立机式に相応しいと思って決めました」と語っておられました。

哲さんは義太夫の号を「中川 粹」と名乗り、以前は東横名人会へ出演されたこともあるセミプロ級。三味線は相弟子で現在プロとして活躍されている豊沢幸治さん。また当日、一段と立派に見えた螺鈿時絵の見台は、哲さんが先輩から譲り受けられたもので、ご子思凡ちゃんの言ですと、中川家の家宝のようなものだそうです。

◇ 猫養発展基金ご協力感謝いたします。

- 一口 山崎一恵 中川哲 滝川雅代
- 梅田利子 八角澄子 岩井啓子
- 倉本路子 豊田好敏 (敬称略)

◇ 平成四年度の猫養同人会費よろしくお願いたします。

- 振替口座 東京3-550348
- 猫養同人会 (発展基金もこちらで扱っています)

* 連句とさかな *

牡蠣 杉江 杉亭

少年時代の思い出である。冬になると港の突堤の石垣に、金槌を持って天然の牡蠣を採りに出かけたものである。

石垣に付着した牡蠣を金槌でたたいて剥がし、冷たい潮水で濯いでそのまま口に入れた時の美味しさ。小粒ではあったが身がよく締り、潮水の加減が何とも言えなかった。そんな海にも防波堤が出来、汚染され、天然牡蠣も遠い夢となった。今宵の酢牡蠣は養殖の広島物、三陸物で我慢することにしよう。

【Q】 19 練習船花の門出に集ひけり
 挙句 臆おぼろにふるさとの空
 右のような付けの時、これは本来の花ではないから挙句はこれではまずいのではないか、という意見が出たのですが、その意味を教えてください。
 (篠原 達子)

【A】 これはいわゆる「根なし花」が出た時の心得についてのお尋ねと存じます。たとえば、貞享四年「時は秋」の巻に、

35 襪織る花の錦のをさ打て 翁
 挙句 柳の水の澄み返へる春 執筆

同じく貞享四年「磨直す」の巻

17 この塚の女は花の名に戯れ 桐葉
 18 誰が泣顔を咲るつつじぞ 芭蕉

元禄二年「陽炎」の巻

35 一門の花見衣のさまざまに 北鯤
 挙句 伝はる藤の筋のどかなり 嵐竹

元禄五年「鶯や」の巻

17 御供に常陸之介も花心 翁
 18 白いつ、じに紅の飛び入 同

このように根なし花(植物以外の花)が出た時は、挙句又は次の付句に、春の他の植物を付けることに一応なっております。元禄七年「夕白や」の巻を見ますと、

35 難波なる花の新町まれに来て 素牛
 挙句 文に書かるる柳山吹 鳳俣

となっており、これとお尋ねの花の句、練習船花の門出に集ひけり

とは、一方は大阪の遊里新町の華やかさを唱い、他は練習船の栄ある出港を花とたたえたものとして、いずれも根なし花にならざるでしよう。それならば、挙句にももう一工夫して、何か他の春の植物を入れるようにされた方がよいと思うのです。

ただ、根なし花か、根なし花でないかの判定はむずかしく、たとえば先の例でも、

実際に練習船が花の咲いている時の出航という意味かも知れず、私はその可能性が多いと思いますが、このような時はどうか、その判定は甚だ微妙です。それに芭蕉たちの作品を見ても、根なし花でありながら、次の付句や挙句に特別の配慮をしてない例も、たとえば、元禄二年「衣装して」の巻、

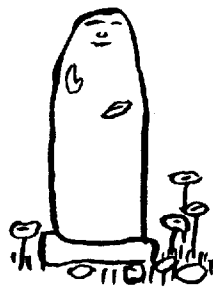
17 花の顔室の涙に泣かせけり 路通
 18 古巢の鳩の子を持たぬ恋 曾良

貞享二年「ほと、ぎす」の巻

35 六経のはなを古瀬戸に秘蔵せむ 如行
 挙句 邪なしとおもへ日ながく 桂橋

などのように、根なし花の次に特別な配慮をしていない例もあります。

結論として、根なし花の疑いのある花の句が出た時は、句主に真意をたずね、はっきり根なし花と決まった時は、作法通り、他の春の植物を挙句に出すのがよいと思います。



新同人紹介

蒲原 志げ子 小林 千雪

御両名を猫養会同人に推選いたします。 猫養会主宰 東明雅

俳諧南北忌

杉内 健司

第十九回俳諧時雨忌(平成三年)の翌々日十月廿九日、宇野信夫氏の訃を聞く、時雨忌歌仙の校合を了えた後ビールをほして哀悼の意を表する。

六月四日(昭和五十五年)私は押上の春慶寺の四世鶴屋南北の墓をたずねた。宇野さんは倒れたままに放置されていた墓を自分で建直され、その傍に自作の短歌の碑を建てられたのだ。その短歌は左の如し。

なつかしや本所押上春慶寺
 鶴屋南北おくつき処

付廻歌仙が成功するかどうかは立句による事が多い——これはいい立句、第三起りにすると決め、九日電話で南北忌にあれを立句に使う許しを宇野さんから得た。

その後、前年の十一月、四週間にわたって朝日新聞に書かれた「役者の句、喃家の句」の中に宇野さん御自身の俳句もあった事を思い出したので、七月十日電話で冬の立句を依頼、十三日上記の発句を頂いた。電話のやりとりだけで用件がすんだのは、西萩窪の宇野家を尋ねて付廻しの事などくどくどお話ししていたからだが、それが何日の事だったかはもうわからなくなってしまった——いづれにしろ六月四日から七月十日の間のある日に違いない。

この付廻しのどの作者についてもいろいろなることがあった。例えば河原崎国太郎さんには八月十三日読売ホールで楽屋風呂でお化粧を落としながら付けてくれた。

「審判の月を仰いで名科白」とは無論御自身のことではなく、固定忠次役の辰巳柳太郎のことをよんだのだ。倒産した新国劇が復活第一回公演の「一本刀土俵入」に安孫

子屋のお蔭を演じて楽屋へさがったのを追いかけて行ったのだ。そこでフジテレビの芸能記者の須藤甚一郎氏と出会った——彼は耳石と名のる我々の連句仲間だった。

四谷怪談の作者四世鶴屋南北がなくなつたのは文化十二年(一八三〇年)十一月二七日である。

深川高校の中川幹雄先生が思い立って「南北忌の集い」を昭和五十五年十一月二七日、江東区総合市民センター公会堂で開催するといふので、その折俳諧南北忌を思いついたのだ。その案内の末尾には次のようにある。

今年の十一月二七日には、多くの俳人が集い、南北忌の連句の会が催されます。これを機会に、歳時記を編まれる方々は、「南北忌」を冬の季語としてお加え下さり、広く世にご紹介下さいますよう、お願い申しあげると幸いです。

※ 俳諧時雨忌は第二回目で中絶。「南北忌」もまだ季節にはなっていない。

編集部より

○ 新年おめでとうございます。去年は内外ともに大きな変化の年でした。そんな中で、猫養会の暮の立机式は心満ちる一日でした。

多くの先生方の玉稿で紙面を飾らせていただきました。有難うございました。

季刊「ねこみの」通信 第六号
 発行者 猫養連句会
 印刷所 アトリエ・ネコ